



見えてきた！教職協働の姿

特集：座談会

SDの強化が 教育連携環境を整える

(前編)

—「健康科学部および伊勢原教学課
第1回教職員協働研修会」開催—

P1~P4

■現状：「教職員協働研修会」は
良いきっかけに

■医学部：ワークショップの開催
が教職協働を推進する

■伊勢原校舎：SDの強化が
教育連携環境を整える

健康科学部看護学科
錦戸教授

伊勢原教育計画部事務室
原室長



■教職協働：SDに繋がる取り組み
2011年度教育支援センター
「FD研修会」

P4

●第2回FD研修会開催 INFORMATION

伊勢原校舎では2011年8月25日に、他大学から講師を招き、教職協働の意義や講師の方の体験を基にした先行事例を教職員で共有することを目的とした「健康科学部および伊勢原教学課 第1回教職員協働研修会」を開催しました。

今回、『COMMUNICATION NEWS UP』では座談会を実施し、伊勢原校舎として、FD、SD、教職協働を進める方向性や課題についてお話を伺いました。

座談会参加者

錦戸 典子	健康科学部看護学科 教授 (健康科学部常任FD委員)
原 義徳	伊勢原教育計画部事務室 室長
内田 晴久	教育支援センター 所長
押野谷康雄	教育支援センター 次長

健康科学部および伊勢原教学課

第1回教職員協働研修会

2011年8月25日(木)に伊勢原校舎にて開催。健康科学部FD委員会、伊勢原教学課 共催。立教大学 大学教育開発・支援センター 今田晶子氏を講師に迎え、教職員協働の意義と他大学の先行事例について教職員がともに学び、関連情報や今後の協働推進に向けた意識を共有することを目的として開催された。

大学教育学会の教職協働に関するアンケート結果で



は、9割以上が「教職員の協働の強化が必要である」と回答している(今田氏の講演より)。

参加者は約60名(職員は約20名)

SDの強化が教育連携環境を整える（前編）

—「健康科学部および伊勢原教学課 第1回教職員協働研修会」開催—

内田：中央教育審議会答申にもありますように、大学としてはFD（ファカルティ・ディベロップメント）とSD（スタッフ・ディベロップメント：職員を対象とした、管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のための組織的な取り組み）の両方を推進することが求められています。それを受け、教育支援センターでもFD活動を推進する上で、SDの視点も重要なポイントだと考えています。

押野谷：東海大学においては、教職協働はまだまだ十分ではないと認識しています。それは、教員と職員が一緒に、大

学人として色々なことを考えていくための話をする機会があまり設けられていないことが1つの要因として挙げられると思います。そういう意味でも、伊勢原校舎の「教職員協働研修会」は先進的な取り組みとして、学内で情報共有していきたいと考えています。



現状：「教職員協働研修会」は良いきっかけに

内田：まず、伊勢原校舎の現状と、「教職員協働研修会」を開催して感じられたこと等をお聞かせください。

錦戸：看護系大学が増え、健康科学部看護学科にとってのライバル校が相次いで出現しています。厳しい環境下で、良い学生に入学してもらい、良い人材として社会に送り出すというところで、教員と職員のパートナーシップを強化して戦略的に取り組んでいく必要があると考えています。職員の方々ももちろんそういう意識は持っていると思いますが、教員と職員の間で事務的なやり取りは日々行われているものの、中長期的な課題を共有しながら、今後どのようにすればより良い教育を学部として、大学として提供できるのかというような話し合いの場が少ないのが現状です。

原：伊勢原校舎には医学部、健康科学部の2学部があります。医学部については診療という特殊な事情や1校舎に1学部1学科であったという歴史的な経緯もあることから、医学部の教育等について職員の係わっている部分が多く、そのことが教職員間の活発な議論に繋がっていると思います。健康科学部についても、同様な教職員間の連携は重要であり、

今回の「教職員協働研修会」は良いきっかけとなるとともに、とても勉強になりました。

内田：「使命感をもって社会に貢献する人材」を育成するためには、それぞれの専門分野が将来どのように発展し、ど

のように社会と係わっていくのかをある程度見極めることが必要となります。医学部では、ANAと提携したプログラム（医療接遇研修）を取り入れる等、特徴的な取り組みがありますが、職員からそのような新たな取り組みを提案することはできるのでしょうか？



原：教育に関してこういう動きがあり、今後はこういう流れになるといった話は、基本的には教員から聞くことが多いですが、職員はそれを受けて、具体的にどういことができるのかを提案します。現在は、医学教育のグローバルスタンダードを進める動きがあり、その基準に合うようにするためには本学のカリキュラムをどのように変えなければならないのかを検討しているところです。検討の場に職員も加わることで、どうやって時間数や教室を確保するのか、どの学年に配置していくのか等の細かく、現実的な検討が可能になります。

錦戸：医学部の教員は診療があることで物理的に時間がなく、教育に割くエネルギーを他の学部のように確保できないことから職員が介入している部分が多いとは思いますが、そのノウハウを他学部で紹介することで、各学部は、職員が持っている素晴らしい力をうまく取り入れながら、教育研究を活性化させることができるのではないかと思います。



医学部：ワークショップの開催が教職協働を推進する

内田：教員のアイデアを具体化する上では、アイデアを聞くことや、情報交換をすることが不可欠だと思いますが、それはどのような場で行っていますか？

原：伊勢原教育計画部内で話し合いをするのはもちろんですが、医学部では2泊3日のワークショップ(カリキュラムプランニングワークショップ、PBL/チュートリアルワークショップ、学生のワークショップ等)を年に3回以上開催していますので、その際に参加しているメンバー(教員、職員)と意見交換を行っています。職員にとっては、泊り込みのワークショップという特殊な空間が教員とのコミュニケーションを深める場ともなっているのです。また、ワークショップのプログラムは教員が中心となって作成しますが、具体化するのは職員なので、そういった部分でも教職員の連携は図られています。ワークショップ参加教員は、伊勢原教育計画部所属教員以外は毎回違う教員が参加するように人選され医学部長より指名しています。その結果、ワークショップ自体の成果だけでなく、教職員の教育に対する理解やモチベーションの高揚に繋がっていると思っています。

錦戸：数年前、医学部のワークショップに参加させていただきました。とても興味深かったです。医学部の教員は、普段は病院で診療をしているため、「教えるとはどういうことか」等、教員としての意識付けの部分を含めた合宿形式のワー

クショップがとても重要ということでしたが、その運営に伊勢原教育計画部の職員の方が大勢係わっておられるので、教員との意見交換の場にもなるのだと思いました。

健康科学部の場合は、職員と事務的な書類のやり取りになってしまうことが多いので、教職員が膝を交えて学部学科をもっと良くするにはどうしたらよいか、というスタンスの話し合いが率直にできる関係性が築けるとよいと思います。

カリキュラムプランニングワークショップ

クリニカル・クラークシップ等の実地臨床能力の修得を重視した卒前医学教育には多数の教員参加が欠かせないことから、1998年度よりワークショップを開催。各教員が教育の基本的な事項を理解するように努め、教育の改善に成果をあげている。

PBL(Problem Based Learning)/チュートリアルワークショップ

参加教員が、PBL/チュートリアルによる医学教育に関する知識を得てその重要性を認識し、積極的に参加しようとする態度と効果的な教育法とするための技能を身につけることを目標にワークショップを開催。

学生のワークショップ

1年次末に成績の思わしくない学生を対象に開催。優秀者より選抜された学生と上級生をワークショップに参加させることで、成績の思わしくない学生のモチベーションアップを図る。

伊勢原校舎：SDの強化が教育連携環境を整える

錦戸：伊勢原校舎では、「コミュニケーション能力」、「チーム連携能力」をテーマとしたFD研究会を過去数年間にわたり、積み上げ方式で開催してきました。まずは、医学、看護、社会福祉の教員間で連携をとることについて検討してきました



が、今後はそれだけではなく、職員とのコミュニケーションやチーム連携も含め、教職員がうまく連携をとることについても検討が必要だと考えています。教職員の連携、SDという考え方は、全く新しい要素ではなく、今までの活動と繋がりがああり、SDを強化していくことによって、伊勢原校舎としての教育連携環境が整うと思っています。

看護学科では、月に何度か全体会議を開催し、教員間の話し合いを行っています。そこに職員が正規メンバーとして参加し、学科の懸案事項を熟知した上で、効率的に物事を進めていく力や、学内の色々な部署と連携をとって業務を遂行する力を発揮して、課題としていることがスムーズに進展するよう、一緒に取り組んでいただければより意味のある会議になると思っています。

内田：議論のところから係わるということですね。

原：伊勢原教育計画部事務室では、広報や入試についても担当していますが、学部学科の中身を知らなければ効果的、効率的な業務遂行はできません。その意味でも、学部学科の教員や入試センターと活発に話し合いをして、広報や入試を戦略的に行っていかなければならないと考えています。

内田：教員と職員と一緒に議論をする上では、職員の経験、年齢、考え方等の個人差がかなりあると思いますが、そのあたりはどのように考えますか？

原：ある程度は職員による個人差が生じることはあるかもしれませんが、それは経験もあると思いますが、その中に入っていきこうという気持ちがあるかどうかだと思っています。

錦戸：今は雇用形態も多様化し、臨時職員もとても多いですね。

原：大学にはいろいろな業務や職種があるので、それぞれの立場で考え方が変わる部分もあると思いますが、いろいろな機会でも共通の意識を持てるようにすることは必要かと思っています。

押野谷：それがひとつのSDとなりますね。

錦戸：「教職員協働研修会」の質疑応答において若い職員から、「教職員が意見交換できる場を全学へ広げてい

き、協働する上でのよい体制作りができれば」という発展的でポジティブな意見も出ています。

押野谷：伊勢原校舎から、新たな発信ができそうですね。

原：そのようにできるとよいと思います。

錦戸：職員は、窓口対応の際に学生の傾向や、問題を抱えている学生等の情報をつかんでいる可能性があるのではないかと考えています。今年度は原点に戻り、教員だけでなく職員の気づきを含めたFD研究会の企画を練っているところです。FD研究会についても、教員だけの研究会という形ではなく、職員も多数参加し、一緒に考えていくことができるとよいと思います。

◆後編に続く (51号に掲載予定)

教職協働:SDに繋がる取り組み 2011年度教育支援センター「FD研修会」

教育支援センターでは、2011年11月8日(火)に「2011年度教育支援センター FD研修会」を湘南校舎にて開催しました(テレビ会議システムで全校舎に配信)。文学部心理・社会学科の宮森孝史教授(2011年度文学部常任FD委員)が、発達障害とパーソナリティ障害をキーワードに「現代大学生の心を読み解く」と題した講演を行いました。

教育支援センター学部支援課(湘南校舎)で主に学科事務を担当では、FD研修会を課内研修会として位置づけ、多くの職員が参加しました。その結果、全体として参加者170名中68名(4割)が職員であり、FDだけではなく、SDという性格を併せ持った研修となりました。

◆「FD研修会」についての情報は、

教育支援センターホームページ <http://www.esc.u-tokai.ac.jp/>

FD活動

講演会・研修会

に掲載しています。



文学部心理・社会学科
宮森 孝史 教授

講演後は、活発な質疑応答が行われた。

FD研修会の模様を収めたDVDの貸し出しが可能
(学内のみ)



東海大学教育支援センター

FD研修会

2012年1月24日(火)に、湘南健康推進室にて活動されているカウンセラーを講師に迎え、第2回FD研修会を開催します。今回は、第1回開催後のアンケートで要望が多かった、学生対応の方法や具体的事例についてのご講演をいただきます。

日 時:2012年1月24日(火)17:30~19:30

会 場:湘南校舎 15号館4階第1会議室(テレビ会議システムで全校舎へ配信)

講 師:兼子 絵里(かねこ えり)先生

講演内容:学生相談では多くのことが語られます。自分とはなにかという青年期特有の悩みから、就職できるか不安だといった、時代を反映したものまで多岐にわたります。臨床現場でどのようなことが話されているのか、どのような対応をしているのかをご紹介します、みなさまの学生支援の何かヒントになればと思います。

問い合わせ:教育支援センター教育支援課(720-2087)

FD、SD、教職協働 について情報をお寄せください。(校舎、学部、職場単位で取り組んでいる活動等)

教育支援センター教育支援課 Tel:0463(58)1211(代)

E-mail: shien@tsc.u-tokai.ac.jp URL: <http://www.esc.u-tokai.ac.jp/>